愛恵福祉支援財団　国際支援企画委員会

バングラデシュ視察 報告書

2023 年 10 月

愛恵福祉支援財団　国際支援企画委員会

バングラデシュ視察 報告書

目　　次

視察報告

ごあいさつ …… 4

視察日程 …… 5

バングラデシュ視察訪問報告 …… 6

バングラデシュ訪問の成果と感想 …… 17

資料

バングラデシュ訪問にあたってのご挨拶 …… 18

スクールソーシャルワーク視察プログラム …… 19

地元教員との会議　発表　方こすも …… 20

Community Social Work Practice & Development Foundation …… 22
年次報告　2022 年 4 月～ 2023 年 3 月
「バングラデシュ中高生のメンタルヘルス改善への
スクールソーシャルワークのパイロット的取り組み」

国際会議パンフレット …… 33

バングラデシュとアジア太平洋地域におけるソーシャルコミュニティの育成　木村真理子 …… 35

日本とフィリピンのオンライン慣習の意義を探る　野田有紀 …… 42

ごあいさつ

公益財団法人　愛恵福祉支援財団
理事長　遠　藤　久　江

バングラデシュはかつて東パキスタンと呼ばれていた国ですが、人口は日本よりも多い１億６千万人の国です。国教はイスラム教で国民の90％近くがイスラム教徒です。日本の経済とは深くつながっていますが、日常的にはあまり身近な感じはしないのではないでしょうか。

2020年のコロナパンデミックの中で、国内外から緊急支援の要請が多くありましたが、木村理事を通して、バングラデシュからも支援要請があり、それにお応えしました。

この支援は一時的なものでしたが、その後さまざまな情報を交換する中で、高学年児童のメンタルヘルスの課題を解決るためのスクールソーシャルワークの試行的なプロジェクト支援の要請を受けました。

何事もはじめはあります。わが国も社会福祉制度を確立し、実践の内容を豊かにするためには沢山の外国からの学びがありました。それは主に先進諸国からのものでしたが、これからはアジアの国々からの学びも必要ではないでしょうか。

そこで、愛恵福祉支援財団はアジアとの関係を深めたいと考え、カンボジア専門ソーシャルワーカー協会への支援に引き続いて、2022年度より「バングラデシュ中高生へのメンタルヘルス改善へのスクールソーシャルワークのパイロット的取り組み」を３年間支援することにしました。初年度の経過を視察すると共に、顔の見える関係を築き、信頼関係を培うことを願ってバングラデシュを訪問しました。

その報告からは、バングラデシュの厳しい社会経済的な社会で奮闘しているソーシャルワーカーの方々の姿を垣間見ることができます。

今後のさらなる活動を期待し、良き成果が上げられるようにと願っています。

2023年９月４日

視察日程

2023年

5月　9日（火）	羽田出発　シンガポール経由　ダッカ到着　ホテルへ
5月11日（水） 〜 5月13日（金）	第6回国際ソーシャルワーク会議出席 木村真理子委員　基調講演 Towards Building Resilient Social Work Communities Globally: Sharing of Experience 野田有紀委員　発表 Global Collaborations in Social work Education: Exploring the Significance of Online Practices between the Philippines and Japan
5月14日（土） 〜 5月15日（日）	地元教員との会議 方こすも委員　発表 視察　学校訪問　① Dhaka Ideal Cadent & school ② Ali Hossain Girls School
5月15日（日）	ダッカ出発　シンガポール経由　16日（月）羽田到着

バングラデシュ視察訪問報告

時　期　　２０２３年５月９日～５月１６日
参加者　　木村真理子　財団理事、国際支援企画委員会委員
　　野田有紀　　国際支援企画委員会委員
　　方こすも　　国際支援企画委員会委員

ワールドソーシャルワーカーデー
第６回国際会議『共同社会活動を通じた多様性の尊重』

World Social Worker Day 6th International Conference on
'Respecting Diversity Through Joint Social Action'

各国からの参加者が集まり、社会福祉の教育と実践における革新的なアプローチを探求し、多様性と包摂の促進に関する課題ついて発表しました。

参加国:
この会議には、以下の様々な国からの参加者が見られました。
バングラデシュ、インド、マレーシア、日本、韓国、中国、アメリカ、ザンビア、ケニア、ナイジェリア、インドネシア、イギリス、オーストラリア、ネパール
など多くの国々が含まれます。

【主要な出席者】
特別ゲスト：Mesbahuddin Ahmed 博士、BAC の名誉議長、物理学者。
招待講演者（一部）:
Eric CHUI 博士 : 香港理工大学応用社会科学学部長。
“今日の社会福祉教育と実践における革新と技術に備える”.
Ranjana Sengupta：インドの Nanritam エグゼクティブディレクター。
“共同社会活動を通じた多様性の尊重：今日の教育の課題”.
Myung Jin Hwang：高麗大学　社会福祉学　教授
“韓国における高齢化と地域追放”
Denison Jayasooria 博：レーシア SDGs 推進協会会長
SDGs と多様な利害関係者モデルにおけるパートナーシップ：SDGs の地域への適用
Mariko Kimura 博士：日本女子大学名誉教授
“共同社会活動を通じた連帯の重要性 – IFAP 地域の組織開発：経験から語る”.

その他参加者 :

海外からの発表者
バングラデシュからの発表者。
バングラデシュからの一般参加者。
バングラデシュと様々な外国からの学生。
総参加者数：この会議には、オンライン参加者を含め、300 人以上が参加しました。

参照：巻末資料　P.34 ～ 46

バングラデシュへの支援プログラム視察

プログラムの名称：バングラデシュ中高生のメンタルヘルス改善へのスクールソーシャルワークのパイロット的取り組み

“Community Feedback on Acceleration Mental Health Development through School Social Work Intervention among Secondary School Students Project”
スクールソーシャルワーカーが中高生と家庭、教員の相談支援や環境調整を行うことで児童のメンタルヘルスの改善を図り必要に応じ専門機関に繋ぐ新たな取り組み

○　視察目的

愛恵福祉支援財団（以下、愛恵）がバングラデシュの MD. Habibur Rahman 氏（以下、ハビブール氏）　をリーダーとして取り組んでいる “Community Feedback on Acceleration Mental Health Development through School Social Work Intervention among Secondary School Students Project” の支援を開始してほぼ 1 年が経過した。今回、ダッカでハビブール氏が代表を務める Community Social Work Practice & Development（以下、CSWPD）が主催する国際ソーシャルワーク会議開催への招待を受け、CSWPD と愛恵の関係構築を兼ねた国際会議への参加と、CSWPD への支援事業の進捗状況を確認することを目的とした。同時にバングラデシュの社会を知り、今後の支援の在り方を考える機会とするものである。

○　当該プログラムの支援に至るまでの経緯

このプロジェクトの担い手としてのソーシャルワーカーの育成を試みてきていたようであるが、より積極的な取り組みをしたいとの思いで、愛恵の支援を求めてきた。

愛恵に、木村理事を通して、2021 年にコロナ禍での緊急支援と併せて、上記の企画書をもって支援要請がなされた。アジア地域における社会福祉の担い手の育成をと考えている愛恵として、国際支援企画委員会において、企画内容を精査し、2022 年度事業計画に挙げて支援を開始した。2022 年度中には、2 回にわたり、オンラインにて現地との会合をおこなったが、活動がわからないところがあり有効な支援となるよう現地視察となった。

○　プログラムの背景

１．プログラムの背景としてのバングラデシュの社会情勢

バングラデシュ人民共和国（People's Republic of Bangladesh）は南アジアにある共和制国家でイスラム圏国家の一つである。人口は１億 6,468 万人で、都市国家を除くと世界で最も人口密度が高い国であり人口は世界第８位となっている。豊富な水資源から米やジュートの生産に適し、かつて「黄金のベンガル」と称された豊かな地域であったがインフラの未整備や行政の非能率から、現在はアジアの最貧国に属している。しかし、近年の経済的発展は目覚ましく、2019 年の GDP が 1,906USD に達し世界で最も経済成長率の早い 5.2% の国家に位置している。急速な経済成長は教育首都と農村地域での地域格差をもたらし、全人口の 35.6% を 18 歳以下が占めているが教育を受けた若者のうちの 33.19％は就労できていない。

２．バングラデシュにおける教育制度の概要

バングラデシュの教育制度は就学前教育、初等教育、中等教育、高等教育の４つにわかれており 1990 年に初等教育（小学校：１～５年）が義務教育化された。中等教育は６～ 12 年生の７年間で、10 年生から 12 年生の期間に全国統一試験に合格すると大学にあたる高等教育に進学が可能となる。2017 年には初等教育純就学率が 97％に達したが、小学校修了率は男子 69％、女子 79％、中学校修了率は男子 53％、女子 55％、高校修了率は男子 31％、女子 26％と、途中退学者や中等教育以降の進学率は低い水準にとどまっている。貧困から児童労働をさせざるを得ない低所得者層に対しては穀物支給など就学促進政策がなされてきた。

３．バングラデシュの児童福祉制度の概要

低い進学率の背景には、貧困問題が大きく関わっておりダッカを中心とした児童労働や 15 歳未満での児童婚が見られる。また、家庭内暴力や性的虐待の問題がある中で、児童虐待に対する法整備は不十分である。また、バングラデシュの文化的背景として、女性や女子教育に対する偏見が未だに残存しており、女性が十分な教育を受けることができない状況ある。こうした中で、バングラデシュは 1990 年に「子どもの権利条約」に批准し、2011 年には国家児童政策（National Children Policy）を策定し、子どもの権利の強化、思春期児童や女性児童課題の改善、児童労働の削減への具体的なステップ、NGO と政府の協働など国内の具体的な児童福祉への取り組みなどの基本的枠組みが策定された。その後 2013 年には国内法として子ども法（Children’s Act2013）を制定した。

参考ＨＰ
外務省 HP「世界子供白書 2019」
https://www.unicef.or.jp/sowc/2019/
ワールド・ビジョン
https://www.unicef.or.jp/kodomo/poster2020/bangladesh.html
ユニセフ
https://www.unicef.or.jp/kodomo/poster2020/bangladesh.html

○　プログラムの１年目の進捗状況

１．ハビブール氏のこのプログラムの構想とその普及

2020 年のパンデミックのコロナ禍をきっかけにゲーム・ネット依存化する中高生が増え、不登校に加え、親子間の心理的葛藤やコミュニケーションの減少などから児童のうつ症状やひきこもり傾向などメンタルヘルスの問題が増加した。バングラデシュではイスラム教に基づく家父長制の生活文化が根付き、親や教員におけるパターナリズムが垣間見られ生徒が親や教員に相談をすることは難しい土壌がある。中高生のメンタルヘルスの改善のためには親と教員、生徒の相談を受け関係や環境に介入することのできる存在として、スクールソーシャルワーカーが中心となり相談支援や関係調整、環境調整などをコーディネートする役割を担う**トライアングルモデル（スクールソーシャルワーカーが生徒と教師と保護者の三者の関係調整や環境調整を図る新しい実践モデル）**を構想した。

２．対象校の確定と関係の構築

プロジェクト参加校

1. Mohammadpur Preparatory School & College (Boys Section)
2. YWCA Girls School
3. Lalmatia Girls School & College
4. Mission School & College (Combined)
5. Ali Hossain Girls School
6. Dhaka Ideal Cadet & School (Combined)
7. Bengali Medium High School (Combined)
8. Firoza Basher School & College (Combined)
9. King Khaled Institute
10. Fulkuri School

上記の学校のうち 7 校は 1 年生から 11 年生までが在籍、残りの 3 校は 1 年生から 10 年生までが在籍しているが、いずれの学校においても本プロジェクトの対象となるのは 7 年生から 10 年生までである。

CSWPD 代表のハビブール氏が、各学校との関係構築のため学校へ繰り返し足を運び、教員、子どもたちとの信頼関係を構築し、日常生活の中から生徒らの困り感を把握し事業の実施に協力する学校として 10 の学校から了承を得た。
事業開始に設定した上記 10 校の中等教育校教育関係者に対して、事業の趣旨－地域を基盤とするスクールソーシャルワーク（以下 SSW と略）の介入の趣旨と予測される成果を説明し、教育組織の協力要請を依頼した。また、これらの学校の生徒を対象に、生徒の精神保健状態や日常の生活の状況を収集した。

スクールソーシャルワーカーの養成により将来的には地域における支援者の輪を広げる構想である。

３．スクールソーシャルワーカーの養成

ソーシャルワーク修士号保持者 10 名に SSW 支援の訓練を、専門家（ソーシャルワーク学教員と心理学研究者、公衆衛生研究者）に依頼して合計 5 回の訓練を終了した。

研修会の内容例：

スクールソーシャルワーカーの研修、講師、研修参加者インセンティブ、インターン研修プログラム実施： 2022 年 10 月 1 日～ 10 月 4 日（4 日間）実施

4 段階の訓練プログラムの内容：スクールソーシャルワーカーの役割、メンタルケア呼吸法、ボランタリズムの概念、コーチング・コミュニケーション技法などの基礎研修を実施し修了者に修了証授与

４．プロジェクトを進めるにあたっての機材の購入などをして準備を進めた。

※下記【視察】3 の項目と写真参照

○　2023 年プロジェクト 2 年目に向けての構想と課題

【構想】

学校、生徒、保護者、スクールソーシャルワーカーの関係構築を深め、CSWPD が考案した「トライアングルモデル」（学校と家庭と地域社会の関係性の構築を想定して、子どもたちのコミュニティでの精神保健の向上にスクールソーシャルワーカーがどのように機能できるかを模索しながら、実際のかかわりを模索し、支援の提供を開始する。

スクールソーシャルワーカーは､研修で講師を務めたシニアソーシャルワーカー（心理学研究者、公衆衛生研究者）らによるスーパービジョンを受ける。

【課題】

シニアソーシャルワーカーは、心理学、公衆衛生を専門にした研究者のため、ソーシャルワーク実践経験がない。また、バングラデシュにおいて、社会福祉領域の教員らもソーシャルワーカーの活動先が確立されていないことから、大学教員においても実践力に乏しい。

また、新たなソーシャルワーカーの養成や既存ソーシャルワーカー実践力向上のための研修の費用を確保するための資金確保が必要である。

【視察】

１，学校訪問

① Dhaka Ideal Cadet & School（私立・共学）

商店が連なる街の中に位置し、300 名のプリスクールから Grade9 まで午前午後 2 部制で 300 名

の児童が在籍。教師は 24 名。共学のためか子どもたちは非常に和気あいあいと活発な雰囲気の中で交流した。この学校では学校外のコミュニティセンターにソーシャルワーカーが出向き関わりを持ち、学校内に相談室を設置予定。学費は 500 タカ（月額）。商店街の間に小さな入口があり二階に教室が並ぶ。教室も狭い。貧しい地域で身なりが整っていない児童もみられた。校長によると学校の近隣にあるコミュニティセンターにスクールソーシャルワーカーの活動室を設置予定。

② Ali Hossain Girls School（女子校）

広い敷地内に四方の校舎が立ち並ぶが、半分以上は建築途中。校舎全体は改築工事中で完成すると 1000 名近くの学生が在学できる規模の私立校。現在は Grade 1 − 9 まで 200 名の女子生徒が在籍、教師は 27 名。先の学校に比べると児童たちは大人しく清楚に見えたが実は貧困家庭の児童が多く中退者も多く存在している。学費も 100 タカ（月額）と低額だがそれも支払えない家庭がある。親との関係に課題を抱えている家庭も多いが校長先生は両親との連携の難しさを吐露していた。トライアングルモデル導入については教師全体が既に周知しており取り組みに積極的な姿勢を示していた。職員室訪問時に、15 名以上の教員に挨拶。本プロジェクト外の教員からもネット依存による子どもたちのメンタルヘルスを危惧し、専門職の支援が必要であることを述べる発言がみられた。

２．地元教員との会議

会議は、政府関係の会議会場をレンタルして開催された。

会議は、地元の小学校から 25 名ほどの教員、1 年目の研修を終えたソーシャルワーカー、本事業に関与している大学教育関係者らが参加して確定した 10 校の教員との合同会議が開催され、地元教員から、本事業に対する期待が語られた。10 校の選定にあたってはある学校長がキーパーソンとなりプロジェクト参加について周囲に積極的に働きかけを行った経緯がある。

発言の趣旨は、教員のみでは対応できない現場の状況に対して、第三者が係ることで緩和される子どもと家族の状況改善への期待である。学校教員のキャパシティと能力のみでは生徒が抱えているメンタルヘルスの課題に十分対応できる現状にない。ソーシャルワーカーの力を活用し、協働して、生徒の抱える課題に対応し生徒と家族を支援し、生徒たちの精神保健の向上に貢献することを期待しているとの趣旨である。

方委員から日本におけるスクールソーシャルワーカーとスクールカウンセラー導入の背景や現状、両者の役割の違い、実際の現場におけるその機能と教師、教育コーディネーターとの連携のあり方を講義。野田委員から実際の事例として神奈川県高校内の居場所カフェの紹介を行い、バングラデシュでの今後の可能性案として提示した。関係機関関係者は事業の導入に期待を示し、ハビブール氏とプロジェクトメンバーがこの間丁寧に学校関係者との話し合いを重ね基盤を築いてきたことが伺えた。

その後、CSWPD 財団のソーシャルワーカーとの懇談会を行った。参加者からは、このプロジェクトへの期待がきかれた。また、プロジェクトメンバーの一人からは、実際に児童らが親や教員への悩みを打ち明けることの難しさや、食事をとらずに通学している児童の存在についても触れていた。

３．事務所等プログラムを進めるにあたっての整備

・マンションの１階、８畳程度　５～６名でミーティングをするには十分な広さ

・計画停電がある

・有償ボランティアスタッフが勤務

・購入機材　（予算申請書に書かれていた機材を購入して設置してあり、実際に使用している。）

デスクトップ

プリンター

ラップトップ

ラップトップ

サウンドシステム

プロジェクター

事務所入り口

事務所スタッフと SSW

４．現地からの要望

バングラデシュでの SSW 実践の試みは本プロジェクトが初めてとなるため日本に来日しスクールソーシャルワークの実際について学びたいという要望があった。多くの事例に触れることで、実践力の向上につながることから、事例検討や、プロジェクトメンバーから日本への訪問も計画できるとよいと考える。

○プロジェクト現地訪問を終えて

１．目標の置き方

本事業はバングラデシュの社会的状況を踏まえ、限られた時間の中で成果の可視化が難しい事業であるため成果の評価にあたっては中長期な視野が必要である。事業そのものの成果にとどまらず本事業実現に向けて日本、バングラデシュ両国の若い福祉人材が協働するプロセスの中で人材の育

成が促進され広く国際福祉にも貢献する大きな意義があると考える。

２．更なる子どものウェルビーイングを促進するソーシャルワーカーの力量向上に向けて

今回は、プロジェクト１年目として基盤整備を実施したことが確認できた。また愛恵委員による関係者ミーティングへの参加や学校訪問により、協力校における信頼もより一層強まったものと思われる。

２年目は、実際の活動を行うにあたり、児童や保護者または教員による相談支援の利用を促進する必要がある。現在、児童へのアンケートを実施しているため、教員からの情報提供を受けながら、相談につながる機会になればと思う。

一方で、文化の影響により圧力を感じてしまうというハードルは、担当スクールソーシャルワーカーにとって今後段階的に実施される際に、親や教員という自分より年齢や地位の高い人に対して適切な相談対応ができるのか、課題が残る。バングラデシュ国内におけるソーシャルワーク実践の蓄積は乏しく、このプロジェクトは先駆的な活動となることから、他国の実践を参考にしながら、バングラデシュ文化にあったアプローチ構築の一助となれば幸いである。

バングラデシュ訪問の成果と感想

国際支援企画委員　**木村　真理子**

この度のバングラデシュ訪問は、愛恵福祉支援財団が支援しているプロジェクトの進捗状況を多面的に知る機会となった。この度の訪問をとおして、プロジェクトの対象である小中高生が急速に変化する、社会的、経済的、また、宗教的、文化的要因に強く影響を受けて、不安定な生活を強いられることから、心を病み、安定した学校生活を営むことに困難をきたしている問題に対して、ソーシャルワーカーがどのように支援していくか意欲的に取り組んでいる様子を確認することができた。

昨年国際ソーシャルワークのテキスト（注）を編纂する中で、開発途上国のソーシャルワークのモデルと特徴について考える機会があった。わが国ではこれまでのソーシャルワークが、西欧社会で確立されてきた考え方や方法（モデル）、即ち、人々が生活上遭遇しているさまざまな困難や、課題を解決していく時、個々人の持てる力をいかに強めて、問題や課題に向き合って解決していくか、というモデルでおこなわれてきた。しかし、開発途上国でのソーシャルワークの場合は、個々人の置かれている、社会、経済的状況が厳しく、また、宗教、文化的な価値観に支配されて起こる問題も多いので、西欧的なモデルだけでは十分な効果を上げることができないのではないかと考えられた。そこで、個人に焦点を当てるだけでなく、社会全体も視野に入れた、開発型・福祉混合のソーシャルワークをモデルとした実践を試みようとする動きが国際的にも増えてきた。

この意味で、現在のバングラデシュの社会的な状況からみて、この度支援しているプロジェクトもこのモデルが該当するのではないかと思われる。この度のプロジェクトはスクールソーシャルワークという領域であるが、本来、ソーシャルワークが実際に展開される場合の、援助を受ける者と援助を提供する者との関係性は限りなく対等で、相互に有効的な影響を与え合える関係が期待される。しかし、今回のプロジェクトのような学校を拠点として、子どもの様々なニーズに対して、教師、親、ソーシャルワーカーが関わる場合、なかなか対等な関係性を構築することの困難も見受けられた。

また、財政的な支援を行う組織の課題も考えてみたい。愛恵福祉支援財団の支援は限定的な支援であるが、その間に、現地とのコミュニケーションを密にして、信頼関係を確立し、プロジェクトの実施団体とは国際的な視点で学び合いをする機会と考えたい。このプロジェクト自体スクールソーシャルワーカークのパイロット的な取り組みであるので、財政的な支援にとどまらず、さまざまな機会をつくって、先進的な実践を知る機会を提供することも望まれる。また、継続性を考えると地元の組織や団体からの財政的な支援を得られるべく努力も期待したい。

この度の視察を通しての気づきと、今後への期待は以下の通りである。

1）愛恵福祉支援財団の支援しているプロジェックはバングラデシュの社会を基盤にした、新しいソーシャルワーク実践のモデルになるのではないかと考えられる。

2）このプロジェクトに参加しているソーシャルワーカーたちが、国際的な視点で、学習し、世界共通のソーシャルワーカーの価値を共有し、次代を担うソーシャルワーカーとして成長してほしい。

3）今後も現地とはコミュニケーションを密にして、良き成果を生むことを期待したい。

注：木村真理子、小原眞知子、武田丈編著『ソーシャルワークを知る－世界で活躍するための理論と実践－』（中央法規）

バングラデシュ訪問にあたってのご挨拶

公益財団法人 愛恵福祉支援財団
理事長　遠　藤　久　江

公益財団法人愛恵福祉支援財団からご挨拶いたします。

この度は“Respecting Diversity Through Joint Social Action”をテーマに開催される6 th International Conference と、それに引き続き企画された、当財団の支援によるプロジェクトのセミナーを開催にあたり、ご招待をいただき、ありがとうございました。

財団は木村真理子理事と国際支援企画委員会の Ms Yuki Noda、Ms Cosmo Bang を派遣することといたしました。

愛恵福祉支援財団は1930年にアメリカのキリスト教の宣教師、ミス・ペインが東京近郊の貧しい人々が暮らす地域で、乳幼児や青少年の健全な生活を守るための社会事業活動をしたことを出発点としています。現在、愛恵福祉支援財団はキリスト教精神に基づき、健康で文化的な生活が営まれるように、互いに助け合って生きていく平和な社会建設に寄与していくことを理念としています。そして、そのことを実現するための活動を担う人々を育てる活動に焦点を当てて支援しています。国内外のソーシャルワーカーの育成、研修活動への支援には力を入れておりまして、MD.Habibur Rahman　氏をリーダーとして取り組んでいる「Community Feedback on Acceleration Mental Health Development through School Social Work Intervention among Secondary School Students Project」への支援もその一つです。

日本の社会福祉制度は1945年の第二次世界大戦を経て、70余年の間で大きな発展を見ました。それは日本国憲法に国民の文化的で最低限度の生活を保障するのは国の責任であると明記され、その生存権を実現するための法律を作り、制度を整え、予算をつくり、担い手を教育し、知識と技術の向上に努めてきた結果です。しかし、社会、経済は常に変動し、その影響は社会的弱者に顕著に現れますので、ソーシャルワーカーは常に新しい課題に向き合わなければなりません。愛恵福祉支援財団は「今必要とされているものは何か」を問いながら活動しています。

皆さまが取り組んでいるプロジェクトは貴国にとっては新しい試みだと思います。日本のソーシャルワーク発展のあゆみにおいても、スクールソーシャルワークは一番新しい分野ですので、理論的にも実践的にも試行錯誤しながら実践が続けられています。

皆さんが取り組んでいるプロジェクトは、必ずや、貴国のソーシャルワークに大きな貢献をすると確信しています。何事もはじめの一歩は大切なことです。このプロジェクトに対しての皆様の貢献に敬意を表し、良き成果を上げられますように、期待しています。

Program Schedule

Organized By: JSUS; 公益財団法人 愛恵福祉支援財団 Love & Grace Welfare Aid Foundation 〒114-0015 東京都北区中里 2-6-1 愛恵ビル5F

Facilitated By: Community Social Work Practice & Development Foundation (CSWPD) www.cswpd.com

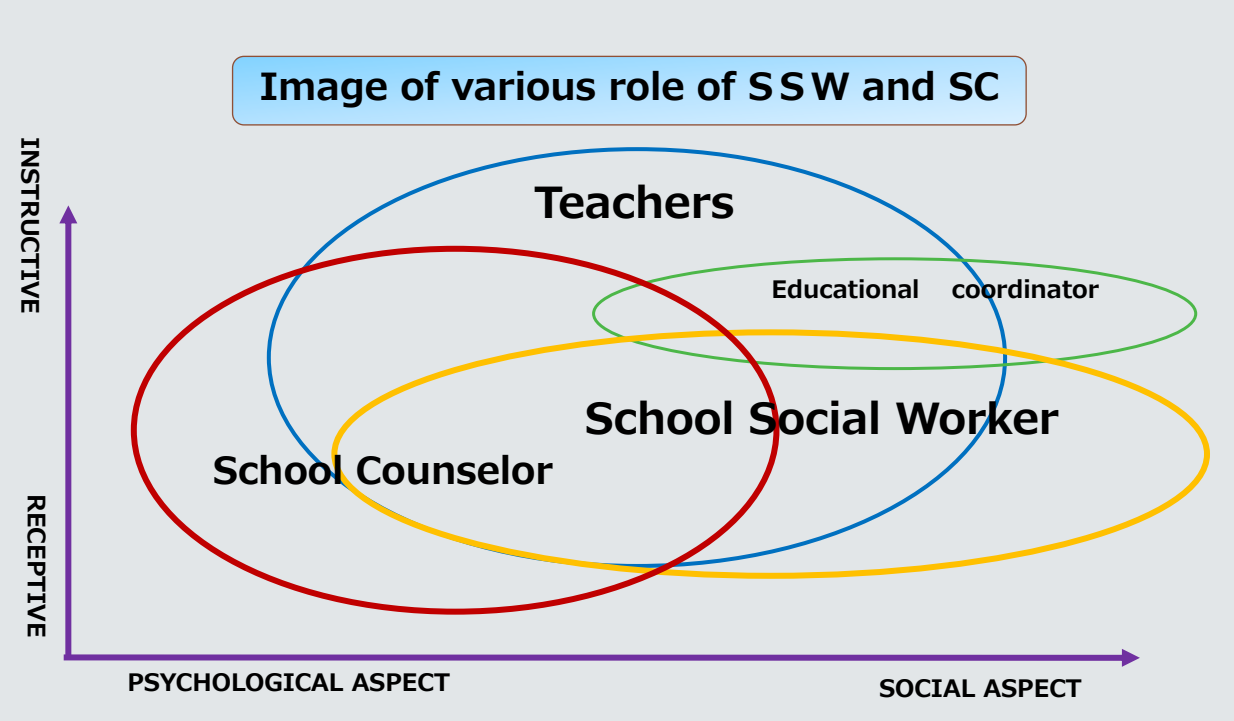
Topic: **Community Feedback on Acceleration Mental Health Development through School Social Work Intervention among Secondary School Students Project.**

Participants: Aikei International Team, Teachers and Parents, Students, School Social Workers, Civil and Project Staff etc.
Venue: **NGO Forum Hall/YWCA Seminar Hall, Mohammadpur, Dhaka**

Days/Dates	Time	Topic/Areas	Tools	Facilitator(s)
DAY-01 (14/05/2023)	9.15-09.55 AM	Participants Registration	Seminar Kits	Md. Mansur Ali/Ateya Nasrin
	10.00-10.15 AM	Guests and Participants Orientation	Multimedia/Pen & Paper	Amzad Hossain Apu/ Md. Dipul Hossain
	10.15-10.40 AM	Short Brief on Social Work Practice at Schools and Project Progress	Multimedia/Pen and Paper	Md. Habibur Rahman, Project Lead
	Refreshment & TEA BREAK (10.45-11.10 AM)			
	11.15-13.00 PM	Feedback Sharing from Guests/ Teachers/Parents/students	Module Xerox copy/ Brown Paper/Multimedia	Md. Dipul Hossain/Md. Mansur Ali
LUNCH & PRAYER BREAK				
Closing				
DAY-02 (15/05/2023)	10.15-11.30 AM	Visit to School-01	Meeting with students & Know ways of counseling	Project Staff
	12.00-13.00 PM	Visit to School-02	Meeting with students & Know ways of counseling	Project Staff
LUNCH				
City Tour				

地元教員との会議
「スクールソーシャルワーカーとスクールカウンセラーの役割の違い」
方　こすも

SCHOOL COUNSELOR (SC)	SCHOOL SOCIAL WORKER (SSW)
SCs have psychological expertise to provide counseling, assessment (information gathering and evaluation), and consultation to children, parents, and teachers in order to resolve psychological issues related to bullying, violence, truancy, and other behavioral problems, developmental issues, psychiatric issues, family environment, parent-child relationships, and other problems that children and students may face within the educational consultation system and student guidance system at schools.	SSWs are professionals who, in addition to the field of education, have specialized knowledge and skills in social work, and who use a variety of support methods, such as working with children and students with problems in their environment and building networks with related organizations, to help them solve their problems.



" バングラデシュ中高生へのメンタルヘルス改善への スクールソーシャルワークのパイロット的取り組み "

年次報告（アクションフォト発表）
2022 年 4 月～ 2023 年 3 月

助成団体　公益財団法人 愛恵福祉支援財団
主催 Jugantor Somaj Unnoyan Sangstha-JSUS
ファシリテーター : Jugantor Somaj Unnoyan Sangstha-JSUS
コミュニティ・ソーシャルワーク実践開発財団

Step 1

ダッカ北市の 10 校を無作為に選んだ：

1. モハマド・プリパラトリー・スクール＆カレッジ（男子部）
2. YWCA 女子校
3. ラルマティア女子スクール＆カレッジ
4. ミッションスクール＆カレッジ
5. アリ・ホサイン・ガールズ・スクール
6. ダッカ・イデアル・キャデット＆スクール（合同）
7. ベンガル・ミディアム・ハイスクール（統合）
8. フィロザ・バッシャー・スクール＆カレッジ（複合校）
9. キング・カレド・インスティテュート
10. フルクリ・スクール

Step 2

上記学校当局に要望書を送り、回答を得た。以下の写真はその時のものである。

Step 3

グループ作り（教師グループ）：事前に学校当局の許可を得て、学校の敷地内でグループビルディング。先生方のグループ作りの様子を写真でご紹介します。

ガーディアン・グループのフォーメーション

ガーディアン・グループのフォーメーションに関する写真を以下に掲載する。

学生のグループ形成　生徒のグループ形成の様子を写真で紹介する。

Step 4

プロジェクトチームとスクールソーシャルワーカーのミーティング／オリエンテーション。以下はこの活動に関する写真です。

活動完了報告書（附属書 -1）添付

Step 5

選ばれた学校とのミーティングと基礎調査の実施。以下は調査実施に関する写真と調査結果である。

調査結果

保護者：保護者のうち 60％が男性で、残りは女性であった。そのうち 23.33％が識字、13.33％が読み書きができ、残りは非識字であった。公務員は 7％、母親は教師が 4％、父親はビジネスマンが 10％、母親は 3.33％、その他の職業が 7％であった。
調査によると、40％の親が子どもの教育に時間を費やしている。90％以上の親がソーシャルメディアを愛用し、27％の親がテレビを見ている。ソーシャルメディアの利用時間は 10 時間以上 6.66％、その他は不定期 6.66％。

早寝早起き、適度な運動は 20％、宗教活動は 16.66％、運動は 3.33％、睡眠は 3.33％。

保護者の約 6.66％が子どもの安全全般を心配し、3.33％が社 会の安全を心配している。
「子どもと仲良くしている」と答えた保護者は約 26％、「きちんと分かち合っている」と答えた保護者は 13.33％、「子どもの管理運営に厳しい」と答えた保護者は 20％、「絶望的で無頓着な保護者」は 10％であった。タバコを吸わない」保護者は約 40％、「子どもの暴力を知っている」保護者は 10％であった。

校内でのカウンセリングの時間を持つことを支持する保護者は約 37％、時間の無駄と考える保護者は 3.33％であった。

生徒：84％が 8 年生、9％が 7 年生、残りが 9 年生。余分な時間をコーチングに費やす生徒が 47％、ハウス・チューターに費やす生徒が 15％、両方に費やす生徒が 5％、余分なサポートを利用しない生徒が 7％。

友人や仲間との関係を良好に保っている学生は約 68％、そう思わないと答えた学生は 4.33％、不満足は 0.66％、絶望的は 0.33％。テレビを見る」49％、「新聞を読む」2.33％、「ラジオを聴く」2％、「電子ニュースを読む」1.33％。

YouTube の利用者は 24％、FB の利用者は 34％、メッセンジャーの利用者は 21.33％、TikTok は 21.33％、Twitter は 2.33％だった。約 24.33％の生徒がバーチャルゲームをプレイし、17％がフィールドプレーヤー、9％がコンテンツメーカー、1.33％がファッションショー愛好家であると回答した。

72％の生徒が 4 人以上の友達を持ち、5.33％が 2 ～ 4 人、7％が 3 人以下と回答。友人や家族と過ごすのが好きだと答えた生徒は約 70％。

約 35.66％が朝早く起き、22％が遊ぶのが好きで、5.66％が夜更かしをする。約 28％の生徒が学校外で何らかの紛争に巻き込まれたことがあると答え、27％の生徒が校内でいじめを受けたことがあると答えた。月の欠席日数は 1 日が約 20.33％、3 日が 18％、2 日が 13.33％。約 66％が「親が怖

い」と答え、10.33％が「無頓着」と答えた。34％が親と何でも共有したいが、13.33％は興味がない。約 9.33％が「先生が好き」、8％が「先生が嫌い」と回答。
約 72％が喫煙を好まず、わずか 0.66％が喫煙を支持している。約 64.66％の生徒がカウンセリングを支持し、6％の生徒が支持しなかった。約 44.66％が教師から愛情をもって管理されていると答え、24.66％が愛情と厳しさの両方をもって管理されていると答えた。

基礎調査結果共有ワークショップ

基礎調査とスクールソーシャルワークモデル発表に関するワークショップの写真

Step 6

学校の活動の推進力を維持するために、ソーシャルワーカーはナショナルデーとインターナショナルデーのお祝いを企画した。以下は国際女性デーの写真である。

Step 7

私たちは、スクールソーシャルワーカーを対象に、学校現場でのソーシャルワー ク実践の分野を紹介するための研修を数回アレンジした。 スクールソーシャルワーカーのための研修は、学校レベルでのソーシャルワー ク実践を取り入れ、紹介するために非常に重要であると考えられているが、これほど顕著に行わ れたことはない。研修の様々なセッションの間、多くのリソース・パーソンが、参加者を成長させるために、彼らの貴重な経験やスキルを分かち合った。

すべての学校当局と尊敬する地域の来賓・保護者は、この取り組みを非常に高く評価し、このような取り組みが、教師だけでなく保護者との相互関係を発展させることによって、中等教育レベルの生徒の精神的健康に測定可能な変化をもたらすかもしれないという期待を表明した。

研修で取り上げられたトピックは以下の通り：

1. 学校におけるソーシャルワークの実践とスクールソーシャルワーカーの役割
2. ティーンエイジャーのメンタルヘルスを改善するための呼吸法エクササイズ
3. ボランタリズム、社会福祉、ソーシャルワーク
4. ソーシャルワークと社会的リーダーシップ
5. 学校現場におけるソーシャルワーカーの役割
6. ソーシャルサービスとソーシャルワーク実践の専門的関係
7. マインドマップとビジョン設定

スクールソーシャルワーカーのメンターシップ研修の写真

ライフスキル＆ピアメンターシップの写真

生徒のメンタルヘルスに関する研修の写真

ハーフ・イヤー・ミーティングの写真

学校の環境保全に関するアドボカシー会議の写真

結論　現在進行中

Community Social Work Practice & Development Foundation
CSWPD

WSWD2023 6th International Conference on

ifsw

"Respecting Diversity through Joint Social Action"

May 11-13, 2023, Dhaka, Bangladesh

VENUE

KIB Convention Hall
KIB Complex, Khamar Bari Rd, Dhaka 1215
YWCA Conference Hall
3/23 Iqbal Road, Mohammadpur, Dhaka-1207, Bangladesh

Organizer

Community Social Work Practice & Development Foundation
CSWPD

Academic Partner

Department of Sociology & Social Work, PUB

Int. Associates

ifsw
대구광역시사회복지사협회
GISW
ATALyC

National Associates

ASW
UDPS (Uttara Development Program Society)
Work for a Better Bangladesh Trust
Health 21 Centre for Best Practices & Management
Institute of Wellbeing BANGLADESH
JSUS
Amara Shobai Foundation
SAFE HOME Rehabilitation Center
MULTINODE COMMODITIES LTD.
RDC

About the Conference:

The WSWD2023: 6th International Conference aims to focus on respecting diversity through joint social action by ensuring human rights and social justice for all people and connecting all people for achieving SDGs. It stems from the People's Charter for a New Eco-Social World and recognizes that change happens locally through our diverse leaderful communities. The keyword "WSWD" embedded in the title means World Social Work Day & theme rationally is very similar to the world social work day theme of that particular year towards its wide orientation.

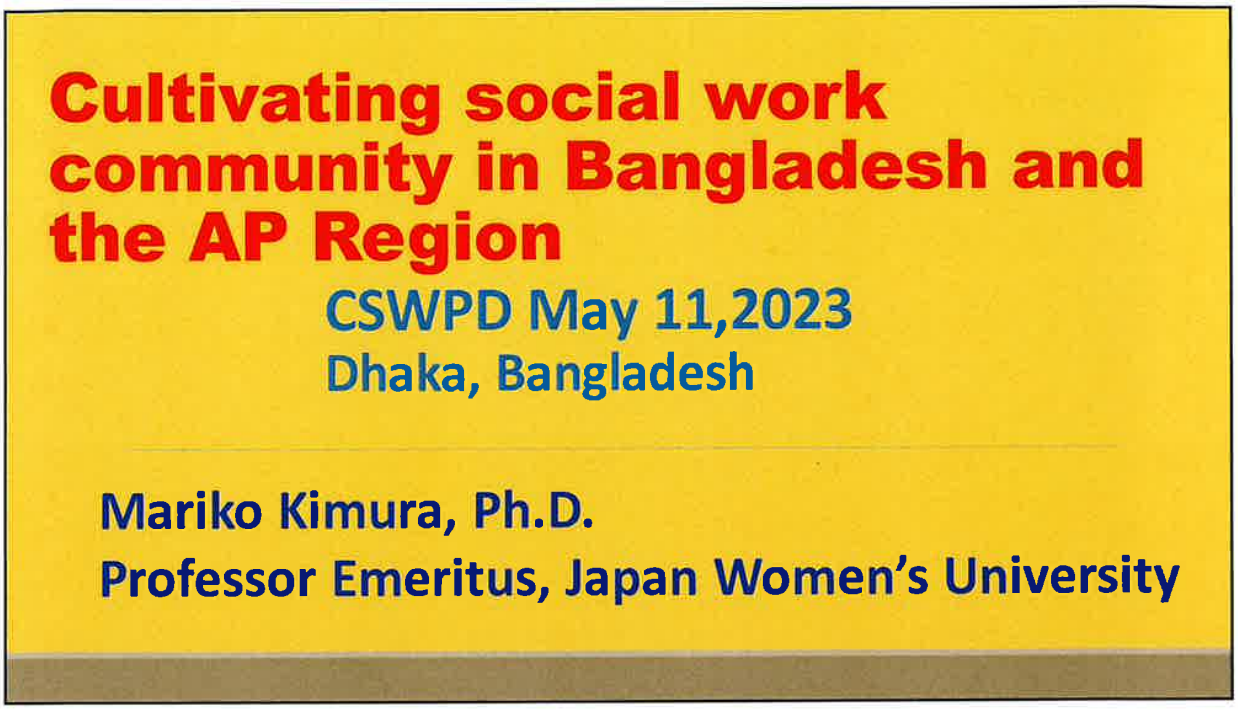
The Community Social Work Practice and Development (CSWPD) Foundation is a non-profit, non-political community service organization, that aims to address different community issues towards a just, friendly, eco-social, resilient and sustainable community. This is the 6th consecutive annual international conference of the organization that aims to bring a fraternity of social workers, researchers, development professionals, academicians, scholars & social work graduates to the same avenue due to sharing, caring thoughts, and growing enthusiasms.

Key Contact (for any Urgent Issues)

Md. Habibur Rahman
Founding President of CSWPD Foundation
Convener, WSWD 2023: 6th International Conference
Associate Professor & Chairman
Dept. of Sociology and Social Work
The People's University of Bangladesh
Mobile: +8801712051203
Email: rahmanh7@gamil.com
www.cswpd.com

Previous Events

「バングラデッシュとアジア太平洋地域における
ソーシャルコミュニティの育成」
木村　真理子（日本女子大学名誉教授）



Social Environment is changing and social workers need to work together to make changes? And Why?

- Negative impact of Globalization on people's lives locally, regionally, and globally
- Many of these are globally inter-twined
- Social issues: Poverty, Disaster, Refugee issues, International migration, Labor issues, Family breakdown, Child abuse, Child labour,, Women's position in society, etc.

Experience: Things we have tried to make changes in the region

- Share ideas on the common issues and work together—Learning from each others' experience Through "Network building by projects"
- Update the knowledge, uplift practice skills, and learn from others' examples that work
- Bangladesh—CDSWF experience—mask project, and webinar during COVID-19 impacted the world

Future goal : Strengthen the networks of social work bodies in AP region

-Develop networks among social workers in the region

⇒benefits for

-Empowerment of the social work profession through capacity building

Learning from Experience: Networks by projects: focus on common themes

AP Region--held workshops at regional conferences—

Sought available funding! Even small amount make a difference!

Enhance networks: AP regional associations work together on Common Themes

Case of Nepal: since the Earthquake, human trafficking, child labour, and level of poverty, lack of education became serious

Source: From the Poster used for Workshop in Nepal, 2016

We can
Create opportunities for social workers to meet face to face

Objectives

① Capacity building: Enrich and expand social worker's views--practice knowledge and skills

② Build stronger SW networks in Asia Pacific Region

We would like to create opportunities & Grow together through workshops

-Expand national SW professional development

-Scale: 50 to 100 participants

-Local host SW associations task committee plan and organize

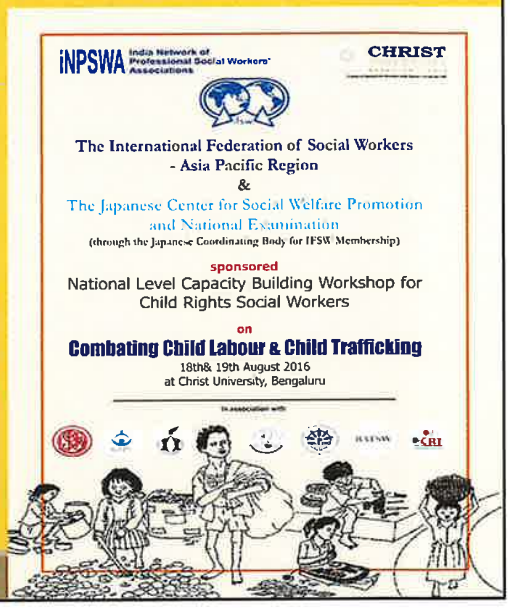
AP member countries can provide technical advices if needed

Examples:
Workshops took different forms in AP Countries
Discussions and interactions
Workshop in the Philippines, 2016
Workshop in Nepal, 2017

Workshop in Japan 2018: AP members visited Disaster sites in Fukushima

Workshops in India: 2016 and 2019

- **2016 Combatting Child Labour**
- **2019 Change in Social Work relationship through cultural Heritage and Creative Expressions**



Outcome of the Workshop

① Enhanced practical knowledge among social workers, academicians, students

② Helped participants recognize and value the social work professionals' networks

③ Network size expanded and strengthened among host and members from surrounding countries who participated the workshop

④ Communications enhanced across the countries in Asia Pacific region ⇒As a result

The role of IFSW and its NETWORK became more visible through projects.

Further task Focus on Young SWrs: project is still in progress

- Create more opportunities to work with young social workers
- Some of AP regions, need efforts to reach out
- "We are seeding and cultivating"
- Small-scale workshops can serve for specific purpose

Thank you very much

ソーシャルワーク教育におけるグローバル・コラボレーション
「日本とフィリピンのオンライン慣習の意義を探る」
野田　有紀（愛恵福祉支援財団国際支援企画委員）

Global Collaboration in Social work Education

Exploring The Significance Of Online Practices
Between Japan and the Phillipines

Yuki NODA
CERTIFIED SOCIAL WORKER

Contents

01 Introduction
02 Importance of Online Collaboration for Social Work Education
03 Challenges and Opportunities
04 Case Study
05 Results of the Exchange Program
06 Conclusion

01 Introduction

Online Collaboration Between Japanese and Philippine Social Work Course Students

- My Motivation
- Social Work Education in Japan

01 Introduction

- Social Work Education in Japan
  - Medical Introduction
  - Psychology
  - Sociology
  - Social Welfare Theory
  - Social Security
  - Rights Protection
  - Community Welfare
  - Elderly Welfare
  - Disability Welfare
  - Child and Family Welfare
  - Support for Poverty
  - Health Care and Welfare
  - Criminal Justice and Welfare

02 Importance of Online Collaboration for Social Work Education

Why Global Collaboration is Essential in Social Work Education?

- Exchange Knowledge
- Sharing experience
- Broaden global perspectives

03 Challenges and Opportunities

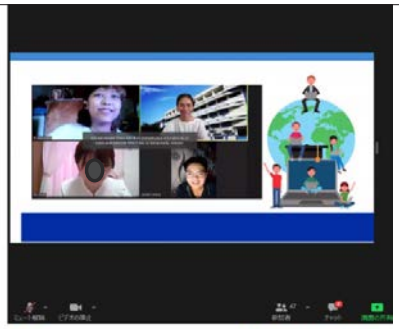
1 Language barriers

2 Cultural differences

3 Advances in Technology

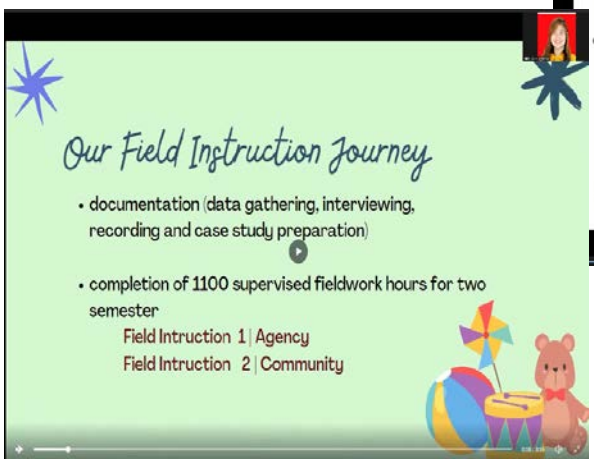
04 Case Study –Exchange Program

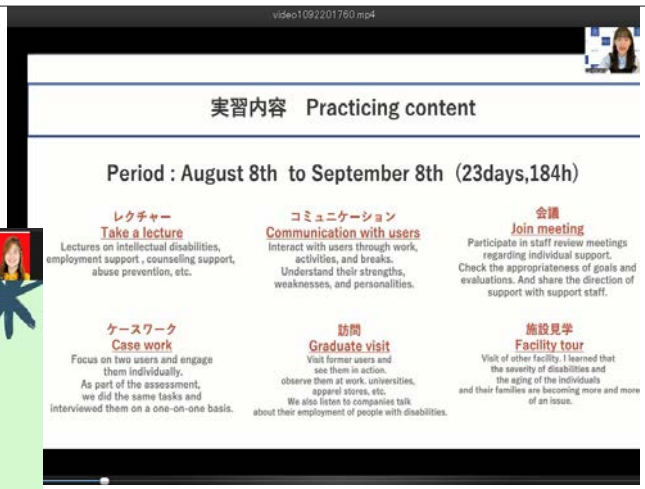
- Introduce both university and culuture
- Group discussion ‘what does it change both country according to Covid19’
- Lecture about social worker activity in Phillipine by professoer
- Report about social welfare institution in both country



Report of Field practice

Presentation by Phillipine student





Presentation by Japanese student

04 Case study-Survey RESULTS

Purpose: "Survey results on participants' self-evaluation before and after the program“

Survey Method: "Conducted a self-evaluation using a 5-point rating scale with participants“

Evaluation Items: "Self-evaluation on participants' communication skills"

Pre-program Evaluation Results: "Participants showed a lack of confidence in their English communication skills"

Post-program Evaluation Results: "Participants' evaluation improved after the program"

Positive Impact: "The program resulted in participants forming a positive impression of the host country, and their motivation and communication skills improved"

Language Barrier Measures: "Addressed language barriers by providing interpretation services "

Increased Interest in an exchange program: "Through the program, participants developed a connection with the Philippines, leading to an increased interest in the country“

Responses from 21 participants

Question	Mean
1 Interest before program	4.2
2 Confident before program	2.8
3 Confident after program	3.65
3 Confident future program	4.3
5 Impression students	4.15
6 Smoothly communicate	3.05
7 New learning from program	4.05
8 Interest after program	4.25
9 Thoughts change after program	3.7

05 Results of the Exchange Program

・Successful in promoting cultural understanding and developing intercultural communication skills

・Knowledge gained about social issues and social work practices in other countries

・Importance of having an exchange partner who is interested in other cultures and has an inclusive character.

THANK YOU FOR
LISTENING

愛恵福祉支援財団　国際支援企画委員会
バングラデシュ視察　報告書

2023 年 10 月　発行

発行者　公益財団法人　愛恵福祉支援財団
〒 114-0015 東京都北区中里２－６－１
TEL 03-5961-9711 FAX 03-5961-9712
e-mail：loveandgrace@aikei-wf.or.jp
印　刷　アーク印刷株式会社